



NO.433

R5年9月1日

発行

〒869-1217

熊本県菊池郡

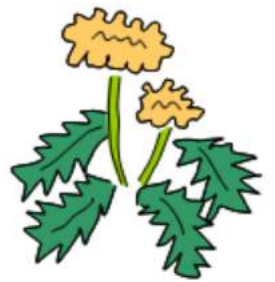
大津町森54-2

社会福祉法人

三気の会

三気の里

☎096-293-8100



けを心がけてほしい。話が出ない子だけどいっばい話しかけてほしい。声かけをして仲良くになれる。声がないけど話したいと思っっている。一日中話さないこと、話しかけられないこともある。

「還 暦」

理事長 松田 健



私事ではありますが、還暦という人生の節目を迎えることが出来ました。これもひとえに利用者の皆様、親御さんご家族の皆様、スタッフの皆様のお陰と感謝の念に堪えません。福祉の仕事をするような人間性を持ち合わせていない私が、しかも管理職をするような器ではないにも関わらず長年にわたり勤めさせていただきました。この仕事を続けていく内に、自分で言うのはおこがましいのですが、人間として多少ですが成長したかもしれません。

利用者の方は、特に私の先生です。つねり、噛み付きなどの他傷行為があるAさんがいます。どうしてこういうことをするのか分かりませんでした。注意す

ればするほど行動がエスカレートしていきます。生育歴を調べたところ、幼い頃は施設で育てていました。親御さんとの面会もままならない状況だったようです。自分の接し方が変わりました。それと共にAさんとの関係も好転しました。劇的とは言えません。長い年月をかけて徐々にですが、以前の私は、彼の行動を強化させていました。不適応行動を起こすことでしょうか、他者からの注意、注目、かわりを得られなかったAさんという理解が出来ませんでした。「どうしてこういうことをするのか。許せない。自分だったらやらない。」と思い、何とか行動を改善させようと不適応行動にだけ向き合っていていました。Aさんの悩みや苦しみは看過していました。しかし、普

段から話しかけ、こちらから話を聞く度を徹底し、つねってきても今までのように制止するのではなく、次にすべきことを伝えるような接し方に変えたところ、Aさんの表情が和らいできたように思えました。強迫性が薄らいでいきました。

頭では理解していましたが、Aさんに関しては当初失敗しました。私も年齢を重ねることに、他者の意見を聞けるようになり、怒りの感情もだいぶ減ってきました。近年でいうとアルボムツシ・スマナサーラ著『怒らないこと』（サンガ新書）を読んだから力が抜けていきました。他人のせいにする考えの浅はかさを知りました。Aさんは今でも私の最大の先生です。

家族の方からも多くを学びました。ある親御さんから、声か

小学生が下校の時間帯に町の放送が流れます。「見守りと声かけをお願いします」と。これだと私は思います。わが子に対してもお願いします。と言われました。親御さんからはいつも多くのことを教えていただきました。

スタッフからも学びます。人権擁護の意識が高く、貫かれている方、環境整備を損得抜きに行える方、人間性に優れ、他者の模範になっている方、向上心があり、常に勉強している方からは特に年齢に関係なく教えられています。次世代を担ってほしいと思っています。

その他関係機関（地域等）の皆様のご理解とご協力によって三気の会は成り立っています。今後とも何卒宜しく願っています。



9月



1班「変わらぬ夏」

コロナ第9波とされていますが、世間は終息したような雰囲気、夏祭りやプール等、コロナ以前の夏と変わらない楽しみ方ができるようになりました。

気温も高く、マスクをしていると水分補給をする回数も減り、熱中症も心配な気候が続いています。マスクを外す機会が増え、任意での着用になった為、感染リスクは高いままになっています。夏を楽しみつつ、リスクマネジメントを行い、水分補給を忘れず、健康に引き続き気を付けたいと思います。

そんな中、マスクを外して支援していると、Aさんに「マスクは？」と聞かれました。今までマスクをしていた為、何故マスクをしていないのか不思議に思われたのだと思います。マスクを着けて頂くよう伝えてきましたが、外出時人混みに行かなければ外していても良いという、Aさんにとっては曖昧な境界線についてどのように伝えるのか、新しい課題と向きあう日々です。

支援員 宮岡 春菜



2班「2班の流儀」

仕事において効率良くかつ迅速に成果を達成するためには、その業種や職種、会社や部署に応じたやり方があると思います。前職が半導体関連の技術職であった私は、仕事のノルマを年単位で設定、達成に向けた計画・実施・進捗等は基本自身で管理し進めていくスタイルでした。良くも悪くも結果が全て自分の評価として返ってくる、無機質な仕事だったとも感じています。

一方で支援員としての仕事は、全く以て1人で進めていくことはできません。対象が利用者さんであり、入所の方に関しては24時間365日支援を必要とします。情緒の波による利用者さんの行動の変容は日常茶飯事、病気や怪我は時を選ばず突然襲ってくる、その場に担当職員が居合わせられないことは多々あります。

2班では、日々の業務連絡だけでなく利用者さんの些細な変化など、あらゆる事についてほぼ毎日LINEを通じて情報共有を図っています。4年前に私が入職した頃にはなかったやり方ですが、今の2班メンバー構成となり自然と出来た仕事の流儀です。賛否両論はあるかと思いますが、私にとっては利用者さんの日常生活がより良い方向へ向かうよう支援する上で欠かせないものとなっています。時代が変わり仕事の流儀も変化していきますが、情報共有によって求められる職員間の繋がりの強固さに変化はないと信じています。

支援員 杉本 安代

3班「ぎっくり腰」

入社して約1年半、少しずつですが利用者の方々の表情や行動から様々な訴えが分かるようになってきたと感じています（正解かはわかりませんが）。

先日、私が担当させて頂いているBさんがぎっくり腰になりました。元々、腰の状態は良くありませんでしたが、突然歩行困難になり2週間は車椅子での生活を余儀なくされました。その間、苦痛な表情もなくニコニコと笑顔で過ごされており、痛いのか痛くないのか、身体の状態はどうか判断が難しい状態でした。

三気の里の利用者の方々も平均年齢が50歳を超え、今後は身体的な部分で様々な不調が増えてくることが予想されます。Bさんと同じように痛みを上手に伝えることができない方は少なくはありません。いかに普段の生活の中から様々な表情や行動を見ておくこと、知ることが大事かを考えさせられる出来事になりました。

その後のBさんは通常の生活に戻り、一番の楽しみである帰宅も出来ました。こちらの心配をよそにニコニコと動きまわるBさん。そんな姿をみてヒヤヒヤしながらもほっこりしています。

支援員 田淵 晃一



4班「Cさんの熱い夏」

今年も、また暑い夏がやってきました。夏といえば高校野球。

利用者のCさんは、毎年テレビを通して高校球児に熱いエールを送っています。熊本予選から「大津が負けた」「九学が負けた」とその日の試合を報告してくれます。熊本代表は甲子園で開会式から5日目の第1試合だと知ると、その日を楽しみにされていました。

地元のチームが負けても、今度は3回戦、決勝戦と他県のチームの応援も欠かせません。この期間は、作業活動にも熱が入るみたいで集中して取り組まれています。野球の試合を観ることがCさんの夏のエネルギー源になっているに違いないと思います。そんなCさんに私も多くのパワーを頂き、酷暑を乗り切ることが出来ていることに、日々感謝しています。

支援員 荒川 百合子

5班「給料外出」

三気の里では、給料外出が月に2回行われています。それぞれの班が利用者の希望に沿って実施しています。5班では、コンビニだけではなく、色々な経験をしてもらうための場所に行くようにしています。7月には西原村にあるAmYaという名前の手作りキャンディーとスイーツのお店に行き、季節フルーツ（ブドウや桃）のパンナコッタやパフェを食べました。また、8月には阿蘇の自然派ソフトというアイスクリームとクレープのお店に行きました。クレープにアイスクリームを乗せたものや、チョコレート、イチゴのソースがトッピングされたものなど、それぞれが好きな物を選び、美味しそうに食べられていました。

毎回同じものだけではなく、季節に合ったものや、利用者の皆さんが食べたいものを選択できる場を設け、給料外出を実施していきたいと思います。こういった楽しみが仕事への意欲に繋がるように支援していきたいと思います。

支援員 中村 圭助

療育雑記

「人との関わり、

社会との関わり、居場所」

主任支援員 石丸 直美

今年度から別事業所でリハビリを受けるようになったAさん。幼少期からのAさんの思いとは違った生活や様々な受け入れがたい経験が理由で、本来人との関わりは上手くなく、新たな事や、新たな人に慣れる、人を受け入れることが難しい方です。

しかし、現在利用しているリハビリの事業所では、見学に行かれた時から「ここに来たい」と言われ、毎週リハビリの日をとても楽しみに通われています。三気の里では「きつい」「しんどい」と言われ、なかなか歩く事にも消極的な状態なので、機能訓練の他エアロバイクを30分もこぎ続けていると話聞き、信じ難くもあります。リハビリに通っている日は体力的にしんどさもあるはずなのに、リハビリの日が楽しみで仕方ないのです。楽しみとなっていることのひ

つは、もちろん機能回復訓練であり、怪我をきっかけに思うように動けなくなっていた自身の不安への払拭と、どうにか怪我をする前のように、人の手を借りずに自身の力で歩き動きたいという思いがあります。しかし、それ以上にリハビリをして下さるスタッフ、そして通ってこられる方々との関わりが楽しいようです。三気の里に戻って来て言われるのは、「おもしろいよ。笑ってばかりだった。」という言葉です。どのような訓練をしてきたのかは、あまり話されませんが、とにかく楽しい、おもしろいということ言われ、その晩は寝付くまで感情が高ぶります。

幼少期から高校生の思春期に親や親族、関わる同年代の人たちと上手く付き合えず、人への嫌悪感が強く残っているため、リハビリという新しい場で、偏見なく、親身に受け入れてもらい、楽しく人と関われることがAさんにとって新たな居場所となり、三気の里以外の社会と繋がっていることが大きな喜びとなっているように思います。考

えてみると、幼少期の父との生活、精神科入院、施設入所といずれもAさんの望む生活とは違う生活をして来られています。自ら望み、努力して通えた高校も途中で通えなくなっており、Aさんが望む居場所は5年以上なく、与えられた場で生活をしてきています。そう考えると、リハビリを受けている場所はやっぱり自分でも望み、選んだ居場所なのかもしれません。これまで必要があり、周囲が選択してきた居場所は、医療、福祉とはいえ、罪深いものだと思います。

Aさんを三気の里のスタッフの付き添いなく、別の事業所を利用してもらうには様々な心配がありました。Aさんの特性で物事を上手く理解、整理できないことでの、思い違いからくる嫌悪感や被害的感情の高まり、また排泄への不安から日常生活が滞るほどのトイレへの行き来で、リハビリどころではなくなっているのではないかと考えたものでした。AさんとAさんを受け入れて下さっているスタッフを信じて良かったと思います。些細なことですが、日々の服

装、食べるもの、誰と過ごすか、どのように過ごすのか等を個々が選び、個々が望む生活であるようにと思います。



Q1 便り

「起床からの2時間」

支援員 中里 貴永

私はグループホーム一の夜勤専門勤務のため、利用者さんとしっかりと関わられる時間は起床から作業棟に出勤するまでの2時間になります。起床からの2時間で8名の方の、起床促し、着替え、洗面、朝食、歯磨き、トイレ促し、出勤の支援などを行います。余裕が無いと感じることもありますが、一つ一つの日課に出来る限り時間をかけて取り組めるように意識しています。特に最近、ゆっくり食事がとれるようにこまめに休憩の声かけをさせていただいています。

朝食時、私と同じテーブルには4名の方が座られています。だれか一人でも食事のペースが早くなると、全体のペースも早くなりやすいため、早い方には少し休憩をして頂きます。空腹の方には申し訳ないところですが、それでもみなさんしっかりと休憩をとりながら食事を進めることが出来ています。



聴ずかしい話ですが、次の日課に追われて一番焦っていたのは私だったことに気付かされません。限られた時間でも丁寧に、利用者さんの出来ることを見つめていきたいと思っています。

課長便り

「つなぐ」

事業課長 平川 聖子

先日、グループホームの利用者さんの歩行状態の悪化に伴い、リハビリテーションを受けられないかと検討をしました。

まだ40代で介護保険のサービスは受けられない、ただ歩行状態が悪いだけではリハビリは受けられない、かかりつけの整形外科科もない。どこから取り掛かれれば良いのか分からなかったのですが、整形外科やリハビリテーション科のあるいくつかの病院に問い合わせ、地域連携室の方にアドバイスを受けて、まずは急性期病院での原因疾病の治療を行うことになりました。治療を終えた後をどうするか、地域圏域内の病院に治療終了の連絡を入れると、医療保険での訪問リハビリが利用できるかと確認されました。正直に言って分からなかったもので、急いで調べて

利用できることを伝え、訪問看護ステーションと契約し、週3回の訪問リハビリを開始しました。利用者さんに必要なサービスを速やかに提供できない情けなさはありましたが、主治医、担当の相談支援員、施設看護師、各病院の地域連携室に知恵をお借りしながら、リハビリテーションに辿り着きました。

今後施設の高齢化が進み、同様のケースが出てくるかもしれません。解決するための道筋が見えるようにしておかなければいけないと痛感しています。そして、状態回復に向けて、ここからが正念場です。

陣内食堂

「三気の会」

地域づくりへの取り組み
サービス管理責任者

今池 一成

熊本地震で改めて感じた「地域との連携」。その思いは、三気の会事業所（グループホームやアンパ、POTTEIN）が位置する陣内地区の皆さんも同じでした。そのような思いを互いに補い合いながら、地域食堂（いわゆる子ども食堂）「陣内食堂」は、熊本地震後すぐに取り組み

始め、今回（8月19日開催）で18回目を迎えました。

三気の会スタッフ有志と大津町更生保護女性会、地域の方々（10名を超えるボランティアさん、民生委員さん、区長さんなど）で作り上げてきたこの取り組みは、少子高齢化といった地域の課題やよりローカルな視点が求められている障がい福祉の動向のどちらにとっても、これから益々重要な位置付けになっていきます。

食事を通した取り組みは、コロナ禍においてかなりの制限がかりましたが、テイクアウトやフードドライブといった活動に力を入れ、熊本県や大津町といった行政の支援も年々手厚くなっている状況です。

今回のメニューは、とうもろこし農家さんやじゃがいも農家さんからご支援頂き、地域の食材をたっぷりを使用した焼きだて「夏野菜ピザ」でした。こういった取り組みを通して、これからも社会福祉法人としての責務を果たしながら、地域に向けて三気の会の魅力を発信していきたいと考えています。



9月スケジュール

1(金)芸術クラブ・アンパ創作活動
BeTREEレクリエーション
8(金)利用者給料日
9(土)家族連絡会
14(木)嘱託医診察
15(金)ゴールドクラブ・アンパの日
19(火)さんきマーケット
支援学校実習

23(土)話合いの部屋
27(水)2班レクリエーション

毎週月曜日 訪問理容サービス
毎週火曜日 BeTREE役場販売

BeTREE
＜営業時間＞
8:00～18:00

betree314



芸術クラブ

「夏の大作」

支援員 伊藤 愛理

芸術クラブでは、毎月季節に合わせた創作を行っています。

利用者さんがわかりやすい題材を考えたたり、一人ひとりの得意不得意に合わせた創作の手順を準備したりと工夫している所です。出来る上がる作品はどれも想像力豊かで、その先入観にとらわれない表現や色合いに、新鮮な驚きとこれまでにない発見をさせてもらっています。

8月は「ひまわり」をテーマに壁面創作を行いました。作り進めていくうちに利用者の皆さんから「こういう風につくりたい」や、「こうしたらもっとよくなるのではないか」といった、たくさんアイデアが生まれていました。

作ったひまわりを利用者の皆さん達で画用紙上にレイアウトしながら鑑賞します。「これかわいい!」「これはどうやって

作ったの?」と、それぞれの個性的なひまわりを見て会話を弾ませていました。

夏らしい風景の目を引く作品が出来上がったのではないのでしょうか?9月の作品も楽しみにされていくくださいね。



沢山のご厚意

ありがとうございます

ございます

【寄付】
木原成美様

【物品】

森川 琇介様 井上 優様
田口 康博様 坂田 實様
牛島 智子様 坂口 正浩様
赤星 央子様 井手 上恭子様
春野 宗敏様 井口 チズヨ様

【後援会ありがとうございます】

田中 基幹様 木本 博明様
清藤 正弘様 森川 マサミ様
(有)本田 硝子様

